

《書評》 広田照幸著 『大学論を組み替える』(名古屋大学出版会, 2019)

Book Review : Teruyuki Hirota “Daigakuron wo Kumikaeru”

名和 哲夫

私立大学の教授(教育社会学者)であり、日本教育学会の会長である著者による啓蒙の書である。

「大学」は、大学設置基準の大綱化以来、「とめどない改革の波」にさらされており、その中の「おかしなもの」を整理し、副題にあるように「大学」について「新たな議論のために」書かれたものであるといえるだろう。

著者は、既存の「大学」について書かれたものは3種類(①授業改善の論、②大学改革の動向を書いたもの、③高等教育研究者による研究論文・研究書)あるというが、いずれも大学とは何か、大学とは何をなすべきか、大学は何をなすべきでないのかといった「大学論」が不足していることを指摘し、それを本書で「組み替える」(整理すること)で提起するという。

第1章「日本の大学とグローバリゼーション」では、「グローバリゼーション」が進む中で日本の大学政策が、「ネオリベラル」(新自由主義)なイデオロギーを背景に持つ政策アイデアを大規模に借用していることを問題としている。1990年代以降日本の大学政策がグローバリゼーションの影響を受け、1991年の大学答申で大学設置基準の大綱化の代償に「自己点検・自己評価」、「シラバス」、「セメスター制」、「FD」、「授業評価」などの「アメリカ生まれの小道具」が提示・推進されたこと、さらに90年代が進んでいく間に、研究体制や大学制度のあり方を見直す論議が始まる中で「第三者評価の導入」や「評価に基づく資源配分」などのグローバリゼーションを意識した改革が進められたことを批判的に述べている。何回かの(総定員抑制政策の廃止と関連する)大学改革と大学拡充の中で関連して、旧来の「あるべき大学」論とは対立するネオリベラルな大学像が支配的になっていること、それに対して著者は、大学のあるべき姿に関する「古い理想」が「質」を支える重要なイデオロギーだったのではないかと、そのイデオロギーを無効化させて取って代わろうとする近年のネオリベラルな大学像は、究極の理念や哲学に欠け、多くの問題を孕んでいると主張する。

第2章「大学の組織と機能」では、2005年の中教審答申以来の「選択と集中」の原理について、「大学の教育研究の実情をよく知らない外部の人たちの改革アイデアには、問題が多いし、ろくにお金も出さないでにおいて教育研究の高度化を求め続けるのには無理がある」としている。

このように10章ある著書の中で著者は、基本的に現在の大学改革がトップダウンに

よるものであり、さらには外形的な押しつけであって、それに対して旧来の大学が持っていた「大学らしさ」が必要であるということを、批判的な立場で繰り返し述べる。

教育職ではない大学人（大学職員）である評者（私）にとっても書かれていることはもつともなこと、肯定せざるをえないことも多い。「フンボルト理念」（大学は研究中心主義であるという理念）が終焉し、資本主義的なグローバリゼーションの波のなかで一方的に押しつけられる枠、例えば「自己点検評価」、「シラバスの作成」（単位計算に見合った授業時間の厳守が求められ、その計画を示さなければならなくなった。授業出席は当然のことなので評価に入れてはならない。（一方学生は「全出席なのに何故落とされるのか」と言う。そんな「学生のニーズの無定見さ」にもこの書は触れている。)), 「評価制度」、「評価制度に基づく資源配分」（私立大学にとって特に補助金の獲得は死活問題であり、大学改革について基準に満たしていない大学は補助金を減額される。）など、現在の大学の現状、抱えている問題が包括的に取り上げられている。

大学の教育職に就いている者はこの論に当然同感するであろうし、よくぞ主張してくれたという者も多いだろう。大学職員が大学改革・経営のために教員に対して依頼する中で、この種の主張は反論として何回も聞かされてきたことである。（その大学職員もその主張に対して一定の理解はしているのだ。）著者が触れているように日本の高等教育はアメリカからの無判断な借用が多く、そもそも大学制度などもその一例であると評者も考えている。短期大学制度などもアメリカのコミュニティカレッジからの借用である。

ただ、大学に関することは色々な面で〈曖昧さ〉を孕んでいると評者は感じている。ミクロ的な事で一例を挙げれば、先ほど述べた授業時間の問題である。大学時間は一般的に1時間を45分とされる。いわゆる1コマ（90分）2時間であり、これを根拠に講義であれば15週の授業を行い、自宅学習（4時間分）と合わせて半期2単位〈1単位45時間〉の単位が与えられる（ $(2+4) \times 15 = 90$ 時間）。現在の大学制度ではこの授業時間について原則拘束されている。しかしながらそもそも何故45分が1時間なのか。また、自宅学習の時間さえ、1時間=45分と考えられることが多いという疑問については誰も答えられないだろう。

マクロ的に言えば大学制度の問題がある。著者がいうように外圧的な大学改革が進められてきたことの是非はともかく、そもそもの大学制度が〈曖昧さ〉を孕んでいるのではないのか。大学改革の中で大学制度が形作られてきたともいえるのではないのか。さらには、大学や大学改革が〈曖昧〉である以上に旧来の「大学らしさ」というものが曖昧であり、この書においても充分説明し切れていないのではないのか。冒頭に書いたようにこれは啓蒙の書、大学教員向けの啓蒙の書であるらしい。（明らかに大学教員向けに書かれたものであり（大学職員向けでもない）、一般読者は二次的なのだらう。）だとしても、未熟な読者にある種の言い訳を与えてしまうのではないのか。読者にも著

者と同じように改革について考察する中でそれに対峙できる知識と見識が必要だろう。外形的な押し付けではあるが、それによって大学改革が可視化されたのは事実である。曖昧な中で枠を押し付けられることによって一定の教育の質保証が保たれるともいえるだろう。

本書が提示するように、トップダウンとボトムアップのバランスの中で、内部質保証を行うことは必要かつ重要である。この書で示された日本学術振興会の分野別参照基準は評者にとって特に新たな知見であった。